新潟の町

小路めぐり

〈新潟市中央区古町通界隈編〉

この「新潟の町小路めぐり　新潟市中央区古町通界隈編」は、新潟市が2008～09年にかけて古町通沿いの小路に設置した「小路案内板」をもとに作られています。江戸時代に形成された町並みがいまもそのまま残っている新潟の町の歴史と魅力を、小路の散策とともにお楽しみください。

参考文献　「新潟歴史双書」（新潟市発行）
「新潟市街角歴史案内」番板（新潟市）

※掲載の「新潟名所絵はがき」長谷川雪旦「北国一覧写　出羽越後」、甘泉静翁「新かた後の月見」は野内隆裕氏所蔵のものです。

※記載した内容には、歴史学的には定説とすることが難しいものも含まれており、いろいろ説があるかと思います。また、資料等もあるかと思いますが、みなさまがまちづくりを考える際に役立てていただければ幸いです。

小路散策の際には、近隣の方や通行する方のご迷惑にならないよう、節度ある行動をお願いいたします。

〈見方・使い方〉

折りたたんでページをめくるように見てください。

裏も同じように真ん中で折り返し、たたんでください。

●イラスト・写真：野内隆裕
@にいがたなびらねっと　http://www.najiranet.com
●デザイン・本文テキスト：上田浩子
●協力：藤村 誠
●製作協力：roji-ren niigata

2011年11月18日、公益法人日本都市計画学会　創立60周年記念事業「自治体優秀まちづくりグッズ賞」を受賞しました！

企画制作 新潟市
新潟市中央区学校町通1番町602-1　TEL.025-228-1000

※無断転載・複製を禁じます。

2009.3 初版／09.5 第2版／10.2 第3版／11.3 第4版／12.1 第5版／13.3 第6版発行

歴史と成り立ちをいまに伝える新潟の町並み。

幕末・明治初めの資料をもとにした新潟町の鳥瞰図（新潟市歴史博物館みなとびあ製作）。手前の白山神社から南北に「堀」や「通り」がのび、東西方向に「小路」が、また現在と同じ場所（現在の西堀通）に寺町が位置しているのがわかります。

魅力的な小路をめぐって

新潟市は2007～09年にかけて、本町通と古町通沿いの小路に名前の由来とイラストを盛り込んだ「小路案内板」を設置しました。このリーフレットは、その案内板のイラストを使って各小路を紹介しながら、白山神社から日和山住吉神社までをめぐっていく構成になっています。そしてそれは、白山神社から信濃川に沿うかたちで堀と通りを設けて形成された、明暦時代以降の町並みをたどる道筋でもあります。

時代の流れの中で大きく姿を変えた小路もあれば、行き交う人を包み込む路地としての表情を残している小路もあります。それぞれの小路の魅力を楽しみながら、いまも町に残る新潟の歴史を感じてください。

●小路案内板・自立型（左）と貼付型（右）

●街角歴史案内板

白山神社や古町、本町などに設置されている「街角歴史案内板」は、昔の写真を実際の場所で見比べながら解説を読むことができます。どちらの案内板も、設置場所は下の地図をご覧ください。

計画的な町づくり

昔の新潟町は地域ごとに商売を決めて、計画的に町の中に配置していました（右図）。そうした町の成り立ちの一端は、西堀の「寺町」で見ることができます。ここはかつての町の境だったところにお寺を並べたものです。　小路の名前には、「眞浄寺小路」「法音寺小路」のように由来がお寺にあるものや、エリアの職業によるものがあります。古町通2～4番町周辺は中の荷役に従事する小揚が住んでいた「小揚町」で、付近の小路も「小揚小路」と呼ばれていました。明治以降は運送業（丁持ち）に従事する人が増え、小路も「丁持小路」と名前を変えます。信濃川の川岸だった上大川前通周辺に「材木町」や履物職人の「足駄屋町」があるのは、木材が舟で運ばれていたからでしょう。小路めぐり・本町編で紹介している「曲師屋小路」には、ヒノキやスギの薄い板を曲げて容器（ふるいやせいろう、弁当箱等）を作る職人が住んでいたそうです。

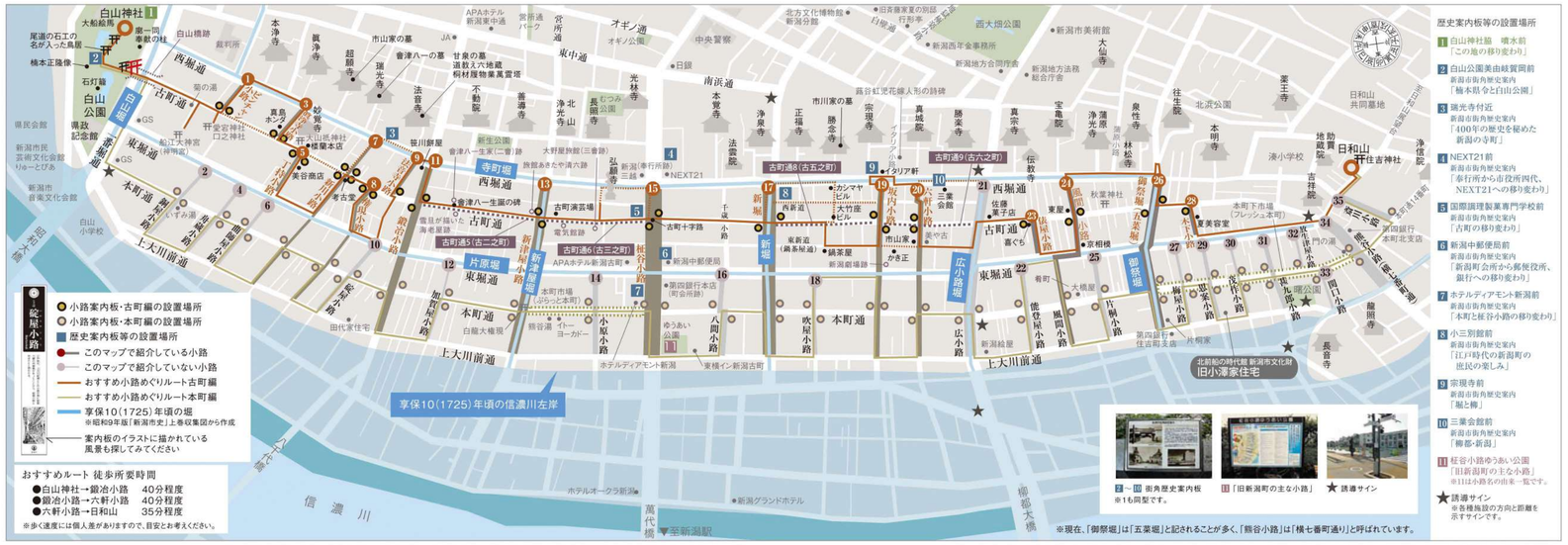
旅館が軒を連ねていた古二之町・三之町（現在の古町通5・6番町）の旅籠町には多くの人が訪れ、全国に名を馳せた新潟芸妓や料理の数々、そしてなにより、みなとまち新潟の暖かいもてなしの心に感嘆したといいます。

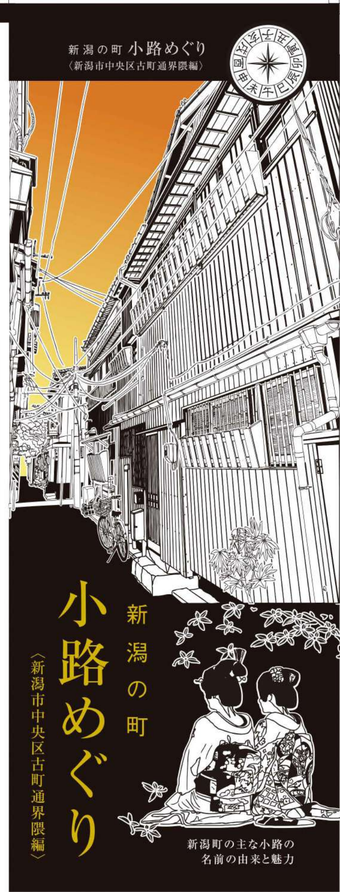
元禄12（1699）年4月の沼垂訴訟立会絵図写（部分）
※昭和9年版「新潟市史」上巻所収図から作成されたもの

●「堀」と「通り」と「小路」

町の移転以降、川と海から運ばれてきた荷物を運搬・取引するため、信濃川の流れに沿うように南北方向に寺町堀（西堀）・片原堀（東堀）という2本の「堀」と、その間に「通り」が設けられました。そして「堀」と「通り」に直交する東西方向には5本の「横堀」と多くの「小路」が設けられました。

その後堀は埋め立てられ、昭和39（1964）年までにすべて道路に変わってしまいましたが、町並みや小路、堀の位置は当時のまま、昔から愛着を持って呼ばれてきた小路の名前もいまに伝えられています。





●鍛冶小路の続きはここから
裏返して裏A中で折ってください

甘泉の「新かた後の月見」に登場する旅館「あきたや 清六」も、新津屋小路にありました

13 新津屋小路（にいつやこうじ）：新津屋小路堀という堀の両側に付けられた小路であった。新津屋小路は明治の町名改正で二番堀と改められた。堀は戦後になって埋立てられ、広い小路になった。

新津屋小路から新潟の町を見ておりますよ。どこで見ているか、探してくださいますかの。

江戸時代、旅籠町・古二之町、三之町（現在の古町通5・6番町）町には多くの旅人が訪れ、みなとまち新潟のもてなしを楽しみました。長谷川雪旦（はせがわせったん：1778～1843年、天保年間に完成した江戸の地誌「江戸名所図絵」の絵師）は、天保2（1831）年に奥羽から越後を旅し、その記録を『北国一覧写　出羽越後』にまとめました。雪旦は、自身がもてなを受けた「海老屋」という旅籠で部屋のようすや料理、芸妓のことなど細かくスケッチを残しています。また、「海老屋」の向かいに會津八一の生家「會津屋」があったことも雪旦の絵から知ることができます。

『北国一覧写　出羽越後』

古町通5番町「松竹館」（新潟名所絵はがき）

古町通8番町「大竹座」（新潟名所絵はがき）

明治時代、こんぴら通り（中央区西厩島町）に「永楽座」という常設劇場ができたのを皮切りに、古町通にも数多くの劇場ができて盛んに芝居公演が行われました。大正時代に活動写真がはじまると劇場は活動写真館へ姿をかえ、昭和の映画全盛時代には、古町通4番町の「昭和館」、5番町の「松竹館」、6番町の「電気館」、8番町の「大竹座」、9番町の「大勝座」と、番町ごとに映画館が並ぶエンターテイメントの一大発信地となります。モダンな外観の商店も増え、一帯は北陸有数の繁華街となりました。古町周辺に喫茶店が多いのはカフェの名残でもあるでしょう。

戦後、テレビの台頭により映画館は次々となくなり町のようすも変わりましたが、新たにできた「古町演芸場」や、毎回大勢の人で賑わう「ジャズストリート」「食の師」「古町どんどん」などが開かれる古町の中心として、今も親しまれています。

もてなしの町からエンタメの町へ

古町通5～7番町

上：右側の赤屋根の双塔の建物が「電気館」（新潟名所絵はがき）
下：同じ位置から見た現在の古町通6番町

「大新潟の銀座街古町十字路」（新潟名所絵はがき）

私も近くにいるから、探してね。

17 新堀（しんぼり）：初めは道心小路という小路であったが、そこに新堀が掘り割られ、その両側が小路になった。新堀は明治の町名改正で三番堀と改められたが、堀は戦後になって埋立てられ広い小路になった。

15 柾谷小路（まさやこうじ）：江戸時代、本町通とこの小路の角に柾屋四郎右衛門の屋敷があったので、この名になったと思われる。上大川前通と西堀の間の小路であったが、明治末に蛇堀、延長された。現在は延長された道も柾谷小路と呼ばれている。明治の町名改正では、横三番町通と改められている。

新潟の花柳界と開港浪漫

古町通8～9番町

老舗割烈や料亭も残る路地は昼と夜では全く雰囲気も違います。歩くといろいろな発見があるはず

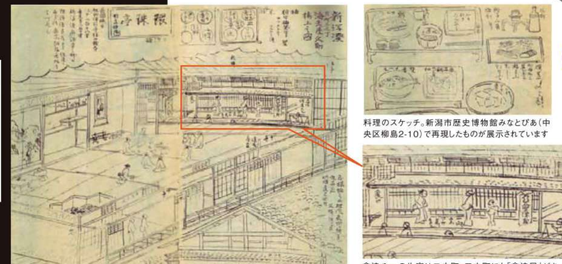
「二・三（古町通5・6）小粋で五・六（同8・9）全盛」と江戸時代から歌われた新潟の花街。8・9番町は5・6番町とは趣が違い、料亭や待合い、そして京の祇園に匹敵すると全国に知られた古町芸妓がいる置屋が数多くありました。芸妓は幼い頃から置屋の養女となって修行につとめ、美しさとともに、芸の素晴らしさでもまれていたといいます。そんな誇り高い芸妓が通った西新道・東新道周辺は、長い年月を過ごしてきた町屋やもてなしの心を感じさせるしっかりいなど、魅力的なシーンで満ちています。

19 坂内小路（ばんないこうじ）：江戸時代、本町通の小路の上手に坂内利兵衛の屋敷、下手に利兵衛の外屋敷があったので、坂内小路と呼ばれたと思われる。明治の町名改正では、横四番町通に改められた。

明治7（1874）年、フランス曲馬団の料理人ピエトロ・ミリオーレは、けがを負ってひとり新潟に取り残されますが、文明開化を推進する県令・楠本正隆や竹山病院初代院長竹山屯（たむろ）の協力を得て、東中通で肉屋を開業します。明治13（1880）年にこの店は大火で焼失しますが、翌年、本格西洋料理店「イタリア軒」を現在地で開業。瀟洒な洋館と料理の味は、新潟の鹿鳴館と呼ばれ人気を呼んだといいます。

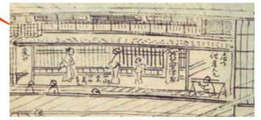
ピエトロ・ミリオーレ

●六軒小路に続く



雪旦が旅籠屋「海老屋」（古二之町：現在の古町通5番町）で描いたスケッチ。窓の向こうの「會津屋」が會津八一の生家です

料理のスケッチ。新潟市歴史博物館みなとぴあ（中央区柳島2-10）で再現したものが展示されています



會津八一の生家は二之町。三之町にも「會津屋」があったので、「二會」「三會」と呼び分けていました

現在は會津八一生誕地の碑が建っています

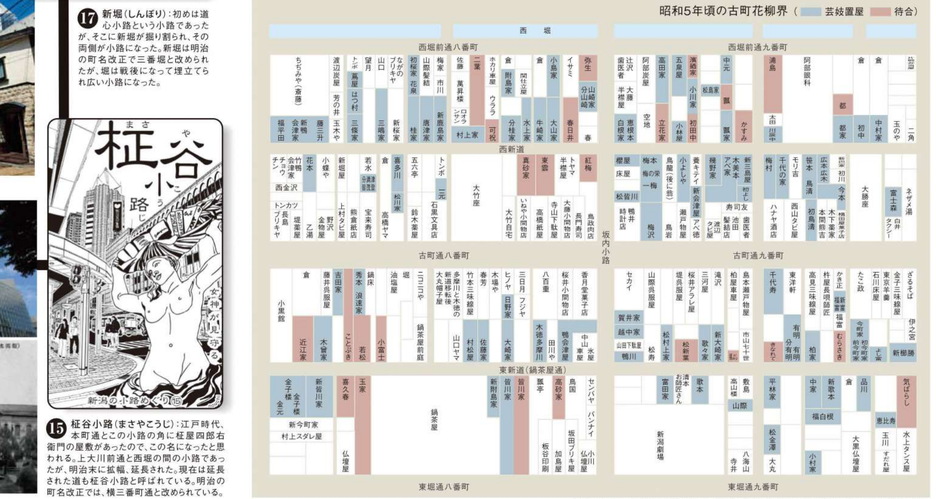
雪旦が描いた新潟芸妓。髪型、着物のことなどもメモしています（左）
現在の新潟芸妓（上）

「古町演芸場」は、昔「電気館」が建っていた場所の向かいにあるんですな。隣は昭和21（1946）年創業の喫茶店「白十字」でございますよ。

屋根の上から町を見守る弘法大師さまと、NEXT21のツーショット！

そして今はマンガストリートなのだ！

柾谷小路今昔。かつては市役所と警察署がありました



『新潟市三業組合組合員名簿（昭和5年）』（新潟市郷土資料館所蔵）をもとに藤村誠さん、高橋久子さんが作成したもの

古町芸妓が秀でた芸を身につけた理由の一つに、優れた踊りの師匠の存在がありました。明治の初めの坂東・市山・市川の三流派が後に市山・市川の二大流派となり、芸妓はそれぞれの門下となって踊りを競いあいました。昭和5（1930）年、新潟市三業組合が結成され、昭和10（1935）年、古町花柳界の真価を世に問う芸道公演会「舟江をどり」を、当時新潟随一の規模を誇っていた「新潟劇場」で4日間にわたって開催し話題を集めました。

時代の変化によって芸妓もその数を減らしていきますが、昭和62（1987）年12月、新潟の企業約80社が出資して全国初の芸妓養成・派遣の株式会社「柳都振興株式会社」を設立し、現在に至る古町芸妓の育成と、もてなしの伝承に取り組んでいます。

平成16（2004）年、柳都振興（株）は芸能文化の伝承の取り組みを評価され、「ちいき経済賞」の「ふるさとスピリット賞」を受賞。平成15年には、芸妓に技を伝え続けてきた市山流が新潟市の無形文化財となりました。古町芸妓の歴史は、いまもとぎれることなく町に息づいています。

大正9年完成の「新潟劇場」（東堀通9番町）

芸妓のけいこの場の三業会館

四代目市山七十世師匠
（写真提供：瀧村誠氏）

市川登模師匠

2010年10月、「全国路地サミット2010inNIIGATA」を三業会館で開催。全国から路地好きが集まって、大盛況だったのニャー。

●坂内小路から続く

⑳ 六軒小路（ろっけんこうじ）：江戸時代からの小路名であり、古町の東側から大川前までの長い通しの路であったが、固有名が付けられたころ大きな家が多く、家数が六軒であったことからこの名がついたものと思われる。六間小路と記された絵図もある。

㉓ 俵屋小路（たわらやこうじ）：古町通から東堀通に至る小路である。享保16年（1731年）の家並帳には、東堀とこの小路の角に「俵屋」という屋号の屋敷があったので、俵屋小路と呼ばれたと思われる。

㉑ 風間小路（かざまこうじ）：江戸時代からの小路名であるが、小路名の由来は不明。直線ではなく、東堀と古町通で食い違っていた。東堀と西堀の間は現在、拡幅され直線になっている。明治の町名改正では、横五番町通に改められた。

わしらは往生院で御祭堀（五葉堀）を見守っておるよ。どこにおるか、探しておれ。

㉖ 御祭堀（ごさいぼり）：江戸時代、御祭堀という堀の両側に付けられた小路であり、古い絵図では「さい小路」「御菜堀」と記されることもあった。堀は明治の町名改正で五番堀とされたが、戦後になって埋め立てられ道路となった。今は「五葉堀」と記されることが多い。

古町通10番町の佐藤菓子店の店先で発見!

住んでいる人たちの気持ちがこもった小路。ほっとします〜。

㉘ 木下小路（きのしたこうじ）：古町通から東堀通に至る小路である。明和5年（1768年）の家並絵図には、この小路下手七軒目の東堀通に木下九助の屋敷があった。これが小路の由来かどうか不明である。

にいがた下町（しもまち）路地散歩

古町通10〜12番町

いつもと違う小路を歩くと、なんだかどきどきして楽しいボンコ!

長谷川雪旦「北国一覧写　出羽越後」より　天保2（1831）年頃の日和山

にいがた名所 日和山

東堀通13番町界隈

●長谷川雪旦の描いた日和山

船乗りが、出帆を決めるために天候や風向きを観測する高台を「日和山」といいます。新潟の日和山の場所は、昔の町名でいうと片原通洲崎町の下（シモ）の突き当たり、現在の東堀通13番町で、名所として賑わっていました。長谷川雪旦（古町5〜7の項参照）の「北国一覧写　出羽越後」に収められた日和山の絵には、頂上の松や遠めがねをのぞく人、沖の船、ふもとの茶屋と町などが描かれています。絵の上方に描いてある丸い石は、船頭や水戸教（みときょう＝水先案内人）が使う「方角石」。現在日和山には、明治24（1891）年に奉納されたものがあります。

●川村修就が描かせた日和山

新潟の初代奉行・川村修就（ながたか）が嘉永5（1852）年に作らせた新潟の風俗絵巻『鑒の手振り（あまのてぶり）』には、日和山の脇を通って湊祭りへ向かう楽しそうな人々のようすが描かれています。この絵巻は新潟市歴史博物館みなとぴあに保存され、複製の一部を見ることができます。

浜へ向かう湊祭の行列。その明かりは佐渡からも見えたとか

かつては上の絵葉書のような船見櫓がありました

日和山から新日和山方面の眺め。手前には日和山共同墓地、砂丘の向こうは日本海。下は2008年に同じ位置から撮ったもの

日和山からの新潟港方面の眺め。手前は本町通14番町。下は2008年に同じ位置から撮ったもの

2011年の日和山

みなとまちの象徴といえる方角石は、白山神社や曙公園などでモチーフに使われています。小路案内板や誘導サインなどにもついているので、探してみてください

白山神社前にあった白山橋と芸妓（新潟名所絵はがき）

白山神社と境内が今の場所に定まったのは、17世紀半ばといわれています。江戸時代には境内に商人の蔵があり、白山堀（後の一番堀）から米や商品を運んでいました。神社の祭礼はとてもにぎわい、芸妓達もお参りをしながら衣装を競いあったといいます。文政2（1819）年に甘泉（かんせん＝結城利之：生年不明～1857年）が著した江戸時代の洒落本『新かた後の月見』には、着飾って白山神社へ向かう芸妓とそれを見る町衆のようすが描かれています。

甘泉『新かた後の月見』

明治維新後、新潟県令楠本正隆（1838～1902年）は開港五港の都市・新潟町に開化政策を実施。その一環として、日本最初の都市公園のひとつ・白山公園が整備され、日和山と並ぶ二大名所となります。

大船絵馬

「美由岐賀岡（みゆきがおか）」に建つ楠本正隆の銅像と、楠本正隆と白山公園の解説がある公園の歴史案内板

みなとまち新潟を代表する名所

白山神社と白山公園

白山神社は、新潟の町衆やみなとを訪れる人たちの深い信仰を集めてきました。神社や公園を歩くと、人々の願をさまざまなかたちで見ることが出来ます。

神社拝殿には、新潟湊に集まった各地からの年貢米を回船に積み込んで、江戸・大坂へ向けて送り出すようすを一面に描いた「大船絵馬」（作・井上文昌：1818～1863年・県指定有形民俗文化財）があります。嘉永5（1852）年に豪商・市島家が、年貢米輸送の安全を祈って奉納したものです。

また、拝殿の手前には「奉　為海上安全　尾道石工山城屋惣八作」「献　安政三年丙辰六月日　宿近江屋利右衛門客舟中」と刻まれた鳥居があります。回船問屋・近江屋の客となった船主や船頭が、海上安全を願ってはるばる尾道からこの鳥居を運んで寄進したのでしょう。

白山公園内の住吉神社左脇にある築山の門柱には、「新潟市廓（くるわ）一同」と刻まれていて、花柳界からの信仰を知ることができます。

白山神社前から見た古町通。左の写真は大正～昭和初期のもの。右は2009年のアーケード工事中のものです。赤い線をひいた建物が、同じ位置に残っているのがわかります

上（カミ）の古町、通称カミフル。昔からの商店街に個性的な店を開く若い人たちが加わって、新しい魅力の発信地になっているチャリよ。

5 丁持小路（ちょうもちこうじ）：昔、舟の荷役をする小揚人足が住んでいたので、小揚小路と呼ばれていた。明治以降、小揚人足に変わって丁持（荷物の運送屋）の仕事をする人が多くなり、丁持小路と呼ばれるようになった。

ステキ♥な路地もたくさんあるカミフル。左上は超願寺小路って呼ばれてるところだよ。

そのランドマーク、考古堂書店の良寛さんの壁画には「書物を読んで道を楽しむ」「心のオアシスああ良寛さま」と書かれてます。

7 新川小路（しんかわこうじ）：初めは平兵衛小路という上大川前通と東堀の間の小路であったが、そこに新川が掘り割られた。幕末までには埋め戻されて道になり、明治になって西堀まで延長された。堀であった時の名が使われている。

良寛さんの作といわれている戯れ歌が笹川餅屋さんの店頭に飾ってありますので、探してみてくだされニャ。

酒は酒屋に 魚は納屋に
新潟女郎しょ（衆）は
寺町に

面白い歌だニャー。

●新津屋小路に続く

11 鍛冶小路（かじこうじ）：鍛冶屋ではなく、屋号か姓から付いた小路名と思われる。上大川前通と西堀の間の小路であったが、現在はその延長上の道も鍛冶小路と呼ばれている。明治の町名改正では横二番町通と改められた。

甘泉（結城利之：白山神社の項参照）の『新かた後の月見』には、新潟の芸妓や花街が多く描かれています。その中の1枚「寺町の図」には、寺町川（後の西堀）をはさんだ向かいのお寺を前にくつろぐ花街の女性の姿があります（右）。新潟の花街の発祥の地は現在の古町通4番町西側の「中道」という所で、そこから寺町通（現在の西堀前通）へ広がっていったといいますから、こうした風景は日常的にあったのでしょう。もしかしたら、良寛さんもこんなようすを見たかもしれませんね。

甘泉は筑紫の人ですが新潟で没し、法音寺にお墓があります。

「新かた後の月見」寺町の図
※これは「五六全図」と呼ばれた現在の古町通8-9番町辺りの風景

楽しげな花街と厳粛なお寺が堀を挟んで向かいあうさまを、水原の医師・三浦鳴村（きゅうそん）という人が漢詩にしています。

東頭ハ娼戸西頭ハ寺（東はお茶屋で西は寺）
一水中分又両種ノ情（女の情と仏の情、それを区切るのが西堀だ）
楽土ハ知ラズ真ニ孰レカ是ナルヲ（極楽浄土はどっちかな）
歌声ヲ接ズレバ読経ノ声ニ接ス（いやはや歌声とお経の区別がつかぬ）

情景がうかんできそうですね。（　）の中に記載した意訳は、新潟市郷土資料館初代館長の池政栄さん（故人）によるものです。
（『人生は走馬燈』池政栄著：新潟日報事業社刊より）

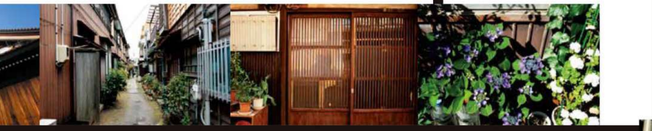
古いものと新しいものが出会う町

古町通1～4番町

※小路の番号は地図記載の番号です。

1 ピンチャン小路（ぴんちゃんこうじ）：江戸時代の絵図にはなく、明治になってできた小路。その名には、小路のゆはどに鍛冶屋があって、そこを通るといつも金槌の音が聞こえたことからその音をもじったという説と、古町通と小路の角にピンチャンというあだ名の鍛冶屋が住んでいたという二つの説がある。

3 眞浄寺小路（しんじょうじこうじ）：小路の隣に妙覚寺があり、古い絵図には妙覚寺小路と記されている。西堀の眞浄寺に通じる小路でもあったため、眞浄寺小路と呼ばれるようになったと思われる。



8 権現小路（ごんげんこうじ）：江戸時代、古町には熊野権現社があり、権現社と東堀の間の小路は権現小路と呼ばれていた。その後、この小路につながる東堀と上大川前通の間の由右衛門小路も権現小路と呼ばれるようになった。

9 法音寺小路（ほうおんじこうじ）：西堀の法音寺に通じる小路なので、この名がついたと思われる。西堀の寺院の名を付けた小路はほかに上の眞浄寺小路がある。

法音寺（左）と甘泉の墓（中）。右は、足軽屋町（今の本町通1～4）の職人たちが通しるべに建てて6体のお地蔵さんを再建した「道教え六地蔵」